

# 分析のための文章基準を求める

◆物理量があって、計測する基準がある。長さ、質量、時間、光度等々の基本となる単位が定められている。ところが、文章については基準が全くない。

◆もともと日本人の識字率は高かった。現存する最古の瓦版は「大阪の陣」(1614・1615年)を記事にしたものだそうだ。江戸時代、読み書きそろばんを寺子屋で教えられていた。明治維新後、新聞が発行されるようになった。1871年に最初の日刊紙が発行された。このとき、表現形態、方法などが随分と研究されたそうだ。新聞普及のため、ひらがな新聞も試みられた。

◆1872年(明治5)に学制公布により小学校が1873年から始まった。おそらく、学科を如何に教えるかが議論され続けただろう。国語科は特に、体系を持たず、言葉の基準もなく、指導に当たって、試行錯誤が繰り返されたに違いない。

◆司馬遼太郎作「坂の上の雲 全8巻」がある。日露戦争が主たるテーマであるが、小学校が作られ始めていた混乱期の様子が描かれていた(第1巻)。学校運営の思考錯誤が窺われる。正岡子規、夏目漱石の名も挙がってくる。自然科学や社会、歴史は確固たる形があり、子供たちに、時代に応じた示す方向があった。国語をどう教えるかとなると、困惑するしかない。

◆大正8年(1919年)「現代 作文教典」が出版された。夏目漱石の題字でまとめられた書である。当時の価格で4円50銭だから、相対的に高い。作文教典は、「文章起源」「文章と人」から始まり、文学ジャンルの定義へと進んでいく。美文のテーマもある。「文章作法」の章がある。タイトルが面白い。最初が「作る前にお読みなさい」の節がある。「・・・名文を幾たびも読んで味わうのです・・・」などと書かれている。「何を書こうか」「辞句の使い方」「偽らずに書く」「明瞭、優雅、勢力」「思想の修養」・・・と続く。別の章では「作文の心得」などもある。文法などはほとんどなく、技法も紹介されていた。夏目漱石、高浜虚子、正岡子規など、多数の作品が掲載されている。なかなか、力のかもった書籍である。

◆この書籍その物が、文章の基準としても良いほどだ。これほどにまとまった著作物は、現在に、なかなか見当たらない。この書の所々が、どこかで踏襲されている程度である。しかし、作文教典に、基準にするための形態は表されていない。

◆文法は基準にはならない。使われている言葉のずっと後から文法が作られる。言葉は常に変化している。文法が変化について行くことはなく、文法が1つに統一されているのでもない。

◆文章表現のトレーニングがされ、一定の精度を持ち、同じ形態で、主張があり、出来るだけ多くの人に伝達する意思を持ち、常に書き綴られている文章群が基準とするにふさわしい。時代を経ても、同じ形態で、読まれ続けられる文章群が良い。

◆一般論文、大学教授人の文章群、雑誌や新聞記事、昇格論文など、様々な文章を選んで分析を繰り返した。行き着いた所が、新聞の社説だった。当初は、全国紙5紙(朝日、産経、日経、毎日、読売新聞)だった。現在では、全国紙4紙(朝日、産経、毎日、読売新聞)とブロック紙5紙(北海道新聞、河北新報、中日新聞、中国新聞、西日本新聞)、計9紙のそれぞれを一ヶ月単位で分析をし、基準確認を行いながら、表現変化を追っている。2001年1月から、欠かさず毎月の作業になった。